【Vol.14】ヴァンヘイレンの曲から学ぶ、トライアドの実戦譜例

こんにちは、大沼です。

今回は、Van Halen (ヴァン・ヘイレン)の Panama(パナマ)と言う楽曲を参考に、
トライアドの事例と、分数コードの仕組みについて学んでいきましょう。

この曲はかなり有名な曲なので、
もしかしたら、どこかで聴いたことがあるかもしれません。

たまに TV とかでも使われてたりしますし。

トライアドは最もシンプルなコードの単位ですが、(※パワーコードを除く)
上手く使えると、かなり印象的なフレーズが作れたりします。

さらにスケールと共に、今後の講座(というか音楽全般)で
やっていく事の基礎になりますので、しっかりとマスターしていきましょう。

前回や今回の様な実戦的な譜例は、これで学んできた内容全てを使うものです。

学習したものをしっかり理解しているかどうかで、習得スピードが大きく変わりますので、
怪しいところがあったら、以前のテキストに戻って復習しておきましょう。

今後、学んでいく内容も、過去のものを
ずっと積み重ねていった先の話になりますので。

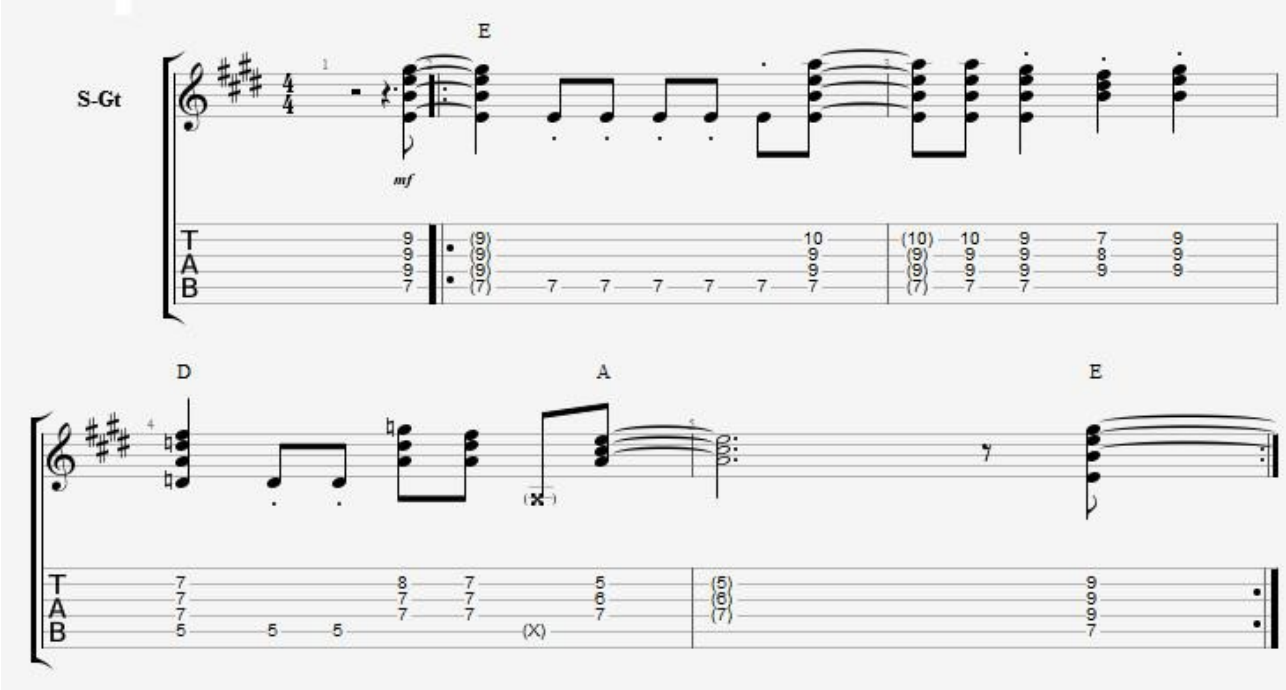
では、参考にする楽曲は以下です。

サンプル楽曲、Van Halen - Panama

Youtube 原曲リンク
http://youtu.be/w-NshzYK9y0
※万が一、リンク先の動画が削除されている場合は、
音源を購入するか、曲名等で検索してください。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

譜例 1、Van Halen-Panama 風フレーズ　0:11～※原曲は半音下げです。



さて、前回、新しい曲やフレーズを練習する時に、最初にやるべきことを 1 つ、
お話ししましたね。

なんだったか覚えていますでしょうか？

そうです。**コード進行の確認**です。

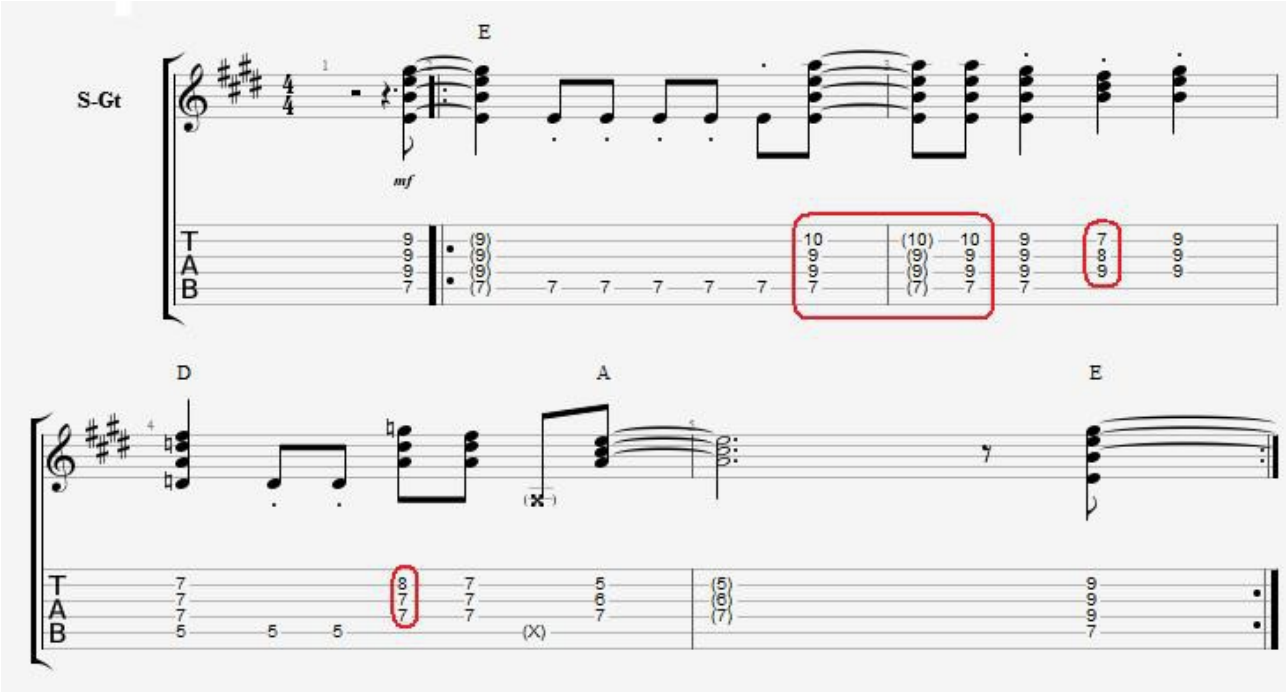
楽器のフレーズは、それぞれのコードに合わせて作られているので、
フレーズは、コード進行と照らし合わせながら、セットで覚えるのです。

上の譜面で出てくるコードは、**E**、**D**、**A** の 3 つですね。

ですが、トライアドの構造について理解していたら、コード進行の表記とは完全には合わない
トライアドのフォーム(ヴォイシング)があることに気がつくと思います。

そう、ここですね。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved



赤枠で囲った部分は、鳴らしている音が、コード表記の構成音には完全には合っていませんね。

この辺は正直なところ、プレイヤーの解釈しだいになってくるんですが、
上の譜面のコード表記でも、間違っているわけではないのです。

例えば 1～2 小節目の E コードの場所。

そこに出てくる赤枠のコード(と言うかフレーズの動き)は、大きな解釈で見れば、
『E のコード進行の中で、音(フレーズ)を色々と動かしている』ともいえます。

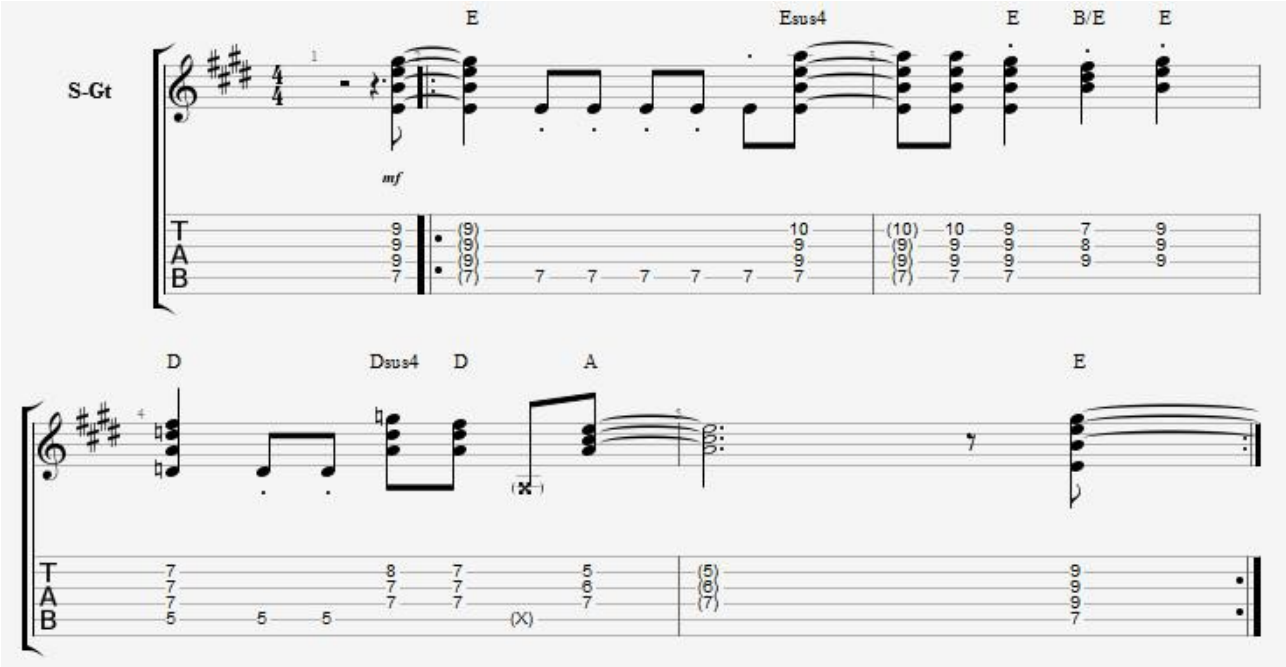
ちょっと難しいかも知れませんが、まあ、「別におかしなことをしているわけではない」
くらいに思っていてくれれば OK です。

では「大きな解釈で見れば OK」ならば、細かく見たらどうなるのか？

次の譜面を見てみましょう。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

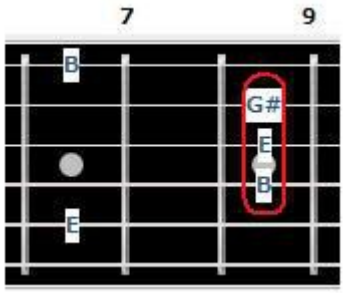
譜例 2



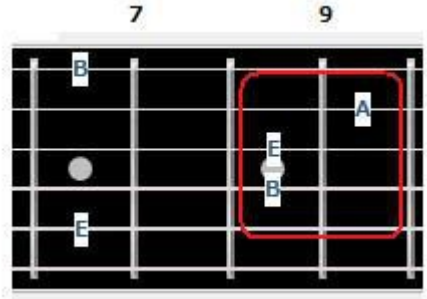
弾いているフレーズの動き全てに、律儀にコード解釈をつけるとこんな感じになります。

1 つずつ見ていきましょうか。

まず、4、3、2 弦の 9 フレットの E のトライアドは、そのまんまなのでわかりやすいですね。



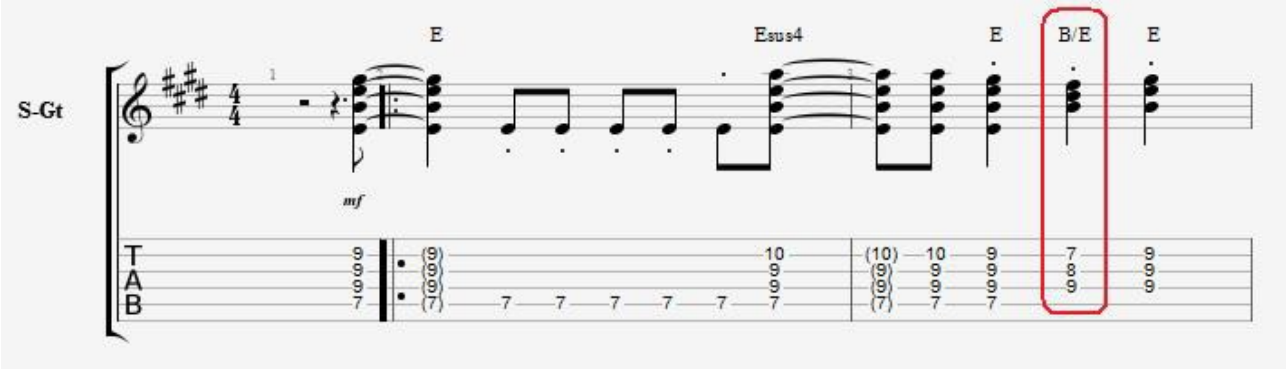
次の Esus4 も普通に sus4 のコードフォームそのままです。



Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

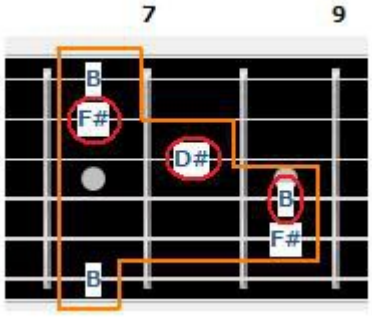
1～2 小節間では、E と Esus4 の 2 つのコードを行ったり来たりしている感じです。

で、問題なのが、次の **B/E** と言うコード。



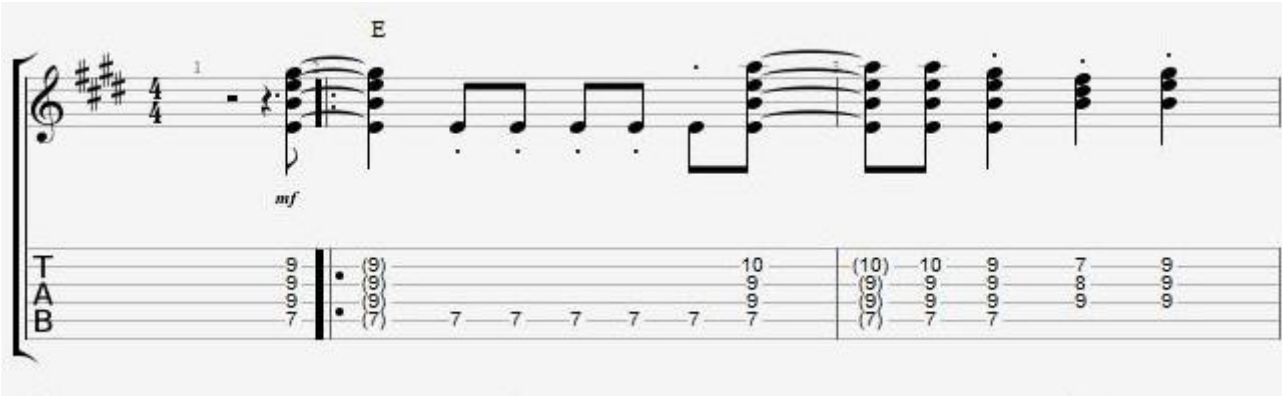
ここで弾いているのは B コードのトライアドですね。

この、6 弦 7 フレットの B 音をルートに見たバレーコードから考えるとわかりやすいでしょう。



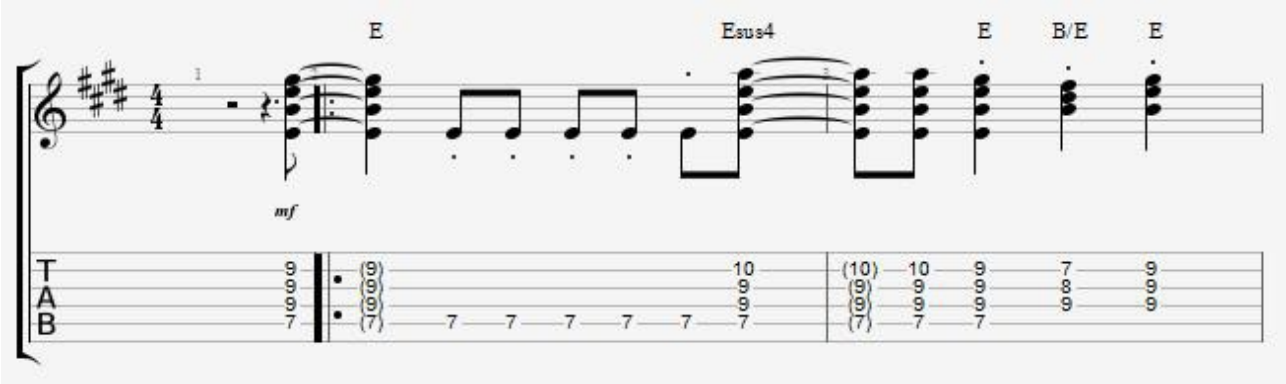
フレーズとして、トライアドは B を弾いているけれど、その小節内での大きな解釈では、
E コードがずっと続いていると解釈しても良い、と先に言いましたね。

要するに、コード進行を、フレーズ一塊で大きく見るならこうで、



Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

フレーズの動きまで細かく見るならこうなわけです。



上の 2 小節間は、コード進行が E の中でのフレーズの動きなので、
5 弦 7 フレットの E(ミ)音を継続的にルート音として弾いていますね。

そのルート音 E のところで、B のトライアドのフレーズを弾いているので、
B/E というコード表記なのです。

要するに、X/X というコード表記の仕組みは、

(大元のコード構成→)X/X(←大元のコードのルート音とは別のルート音)

と言う意味になります。

B/E でいうならば、(コード構成→)B/E(←ルート音)になるのです。

このようなコードは一般的には、分数コードと呼ばれますね。

これがわかりやすくなる考え方として、例えば普通の『E』と言うコードがあるとしますね。

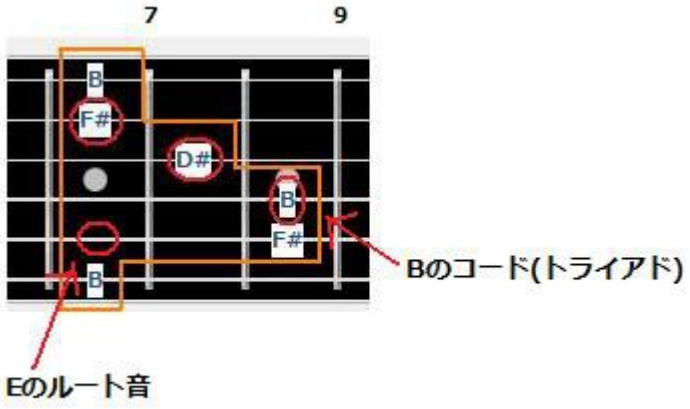
E と言うコードを、無理やり分数コードにすると E/E のように見ることが出来ます。

要するに、(コード構成→)E/E(←ルート音)の状態です。

これの左右のどちらかの方をいじったものが分数コードです。

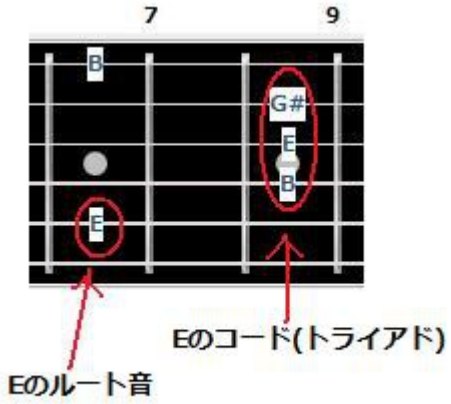
Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

B/E の仕組み



※最初の 2 小節全体で見たら、コード進行は E と解釈して、
　その中で、トライアドが B に動いていると考える。 なので(コード構成→)B/E(←ルート音)。

E コードを E/E っぽく見る



後は、例えばこの B/E と言う分数コードを他の表記にすると、BonE(びーおんいー)みたいに
書かれることがありますが、この場合はオンコードと呼ばれます。

分数コードとオンコードは、正確に音楽理論で解説すると違うものなんですが、
ギターで演奏する場合は、どちらでもほぼ同じような事をする、と思っていて OK です。

ですが、「本当は(その時の場面によっては)違う」、と言う事をわかった上で演奏してくださいね。

この分数コードの表記は、演奏しているジャンルやコードの構成、
後は文脈によっても解釈が変わるので、詳しく知りたい人は、
『アッパー・ストラクチャー・トライアド』などのキーワードで調べてみましょう。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

ピアノのように一度に沢山の音を出せる楽器だと、奏法の面も含めて
ちょっと話が変わってくるんですが、ギターは一度に最大で 6 音しか出せないので、
分数コードでも、オンコードでも、やることがあまり変わりません。
(※やろうと思えばなんとか対応出来ない事もないですが)

後は、分数コードの上でソロをとる時などは、色々と解釈が必要だったりもしますね。

とは言え、詳しく解説するとジャズ理論のようになってくるので、今回は割愛します。

ギタリストは大体、B/E と BonE のどちらも『びーおんいー』と呼ぶし、
そう考えて弾いていることが多いです。(特にロック、ポップスのジャンルでは)

分数コードとオンコードの仕組みはちょっとややこしいので、
今後も例にする譜例で出てくるたびに、必要に応じて解説していきます。

さて、ここまで、コードが E の小節の範囲(最初の 2 小節)で解説してきましたね。

譜例では、その後にコードが D になっている場所もありますが、そこも
E の部分と同じ解釈で大丈夫ですので、コードとトライアドの関係を分析してみてください。

今回の譜例で学んで欲しいのは、

・トライアドのようなシンプルなコードでも、このくらい印象的なフレーズが作れること

・分数コード(とオンコード)の仕組み

・コード進行とフレーズの関係性の分析

この 3 つですね。

このテキストでやったような考え方を理解していると、
今後覚えていく音楽理論(特にコード理論)の理解と習得が速くなります。

今まで弾いたことのある曲や、持っている譜面(スコア)で分数コードが出てきてたりしたら、
そのフレーズ(とコード)を分析してみましょう。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

きっとそのフレーズがどうなっているのか？が理解できると思います。

全体的に少し小難しい話になったので、わかりにくかったら、
質問を送ってくださいね。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved